

「左利き」

地元紙の夕刊の中で、千住 真理子さんというバイオリニストが、左利きの為、プロになりたての頃何百回も右で弾く訓練を重ねた後に疑問を抱き、左利きだからこそ出来る技もある事を自覚し始めた・・・という記事を目にしました。

「左利き」この事実に、僕自身にも拭い去る事の出来ない思い出があります。幼い頃、両親に「みつともないから」と泣きながら右手で箸や鉛筆を持たされた記憶だけは、今も鮮明に残っています。

時は流れ、金管楽器しか演奏した事の無かった僕はDTMから音楽を始めました。そして理論や、音のアナログ嗜好に迷った時、僕は楽器屋へと足を運び、ようやく左利き用のギターを手に入れました。その昔、兄から譲り受けたものの少しも弾けなくて挫折した頃が嘘の様に、僕の左手は自分の音楽を作る大切な武器へと変わりました。

今でも時折、左手でペンを握る人を見ると、何もとがめられる事なく育てられて来た事にすごく嫉妬する事があります。PTSDの一種なのでしょうか。左で箸を持つとすると怖かった父親に叱られていたせいかな、今でも自分の意見を素直に言えない場面があります。

これからお父さん、お母さんになられる方には、もし生まれた子供が左利きだったとしても、絶対に叱ったりしないで欲しい。ダヴィンチやマッカードニー、アインシュタインの様に、密かに持つてるかもしれない素晴らしい才能が芽生えるチャンスを奪う事だけは、例え親でも許されない事なのですから。

2001年7月7日

「感動って何？」

全てがそうだという訳ではありませんが、最近のバラエティ番組をふと覚めた目でみると、かつて一斉を風靡した漫才師やコメディアンが司会を仕切っている割には、実は本人達はギャグなど一度も発してはいなくて、ゲストや一般の参加者から出てくる過去の失敗談や恋愛物語が面白くて、周りが爆笑し、ついそれにつられてこちらも笑ってしまう、という場合が凄く多いのに気が付きます。勿論それで自分も「面白いからいいや」と、ついまた次も見ってしまう事になるのですが、事「お笑い」の世界に限って言えば、伝説と化した「やすし・きよし」の様に我が恥を芸の肥しに変えてでもお客さんに笑ってもらおうとする「本物のプロ」はもういなくなってしまうたんじゃないかと思う事があります。いわばラジオの世界がずっと培ってきた「視聴者参加型」をそのままＴＶでやっている訳ですから、極端な話画面を見ていなくても音声だけ聞いていれば十分に満足出来てしまう。だからＴＶを見る時を控える必要がある時、僕はいつもラジオで聞いて済ませていきます。それで事足りています。

「上祐世代」とか「団塊世代と団塊ジュニアの狭間世代」とか、あまり良い呼ばれ方をしない我々の世代ではありますが、ＯＮの現役時代、百恵、キャンディーズ時代から「ニューミュージック」という新しい音楽時代への変化、アナログレコードから流れる音の豊かさ、優しさ等、常に「本物の感動」に恵まれて育ったという自覚が誰にでも少なからずあります。逆に言うところ、本物の「歓び方」を覚えているからこそ、見せかけだけの「感動」にはそう簡単には釣られまいという警戒心が本能的に動いてしまします。

自身が「お笑い」という業界に携わって改めて思い知らされたのですが、我々一般市民が目にする商品の裏側では様々な角度から「企画」や「演出」が割り込んで、それらにかかると、極端な話「それがどうしたの？」と言いたくなるものです。ビジネスに変わってしまうという始終を垣間見て、前述の「純粹な時代」が本当に遠い過去になってしまったんだと実感させられます。妥協や打算の無い行動こそが人々を感動させるものなんだと信じて青春を過ごした、少なくとも自身には、それが時として耐えられない苦痛になる事があります。

ズバリ言うなら、僕自身から生まれる音楽というのは、かつて自身が憧れた時代へのリバイバル願望なのかも知れません。何の演出もしないし、第一一人の力では出来ない。それでもいい、歌を作る時、歌う時は何にも流されない、紛れもなく「自分自身」でいたい。

それが自分がこの世に残せる唯一のものだと思っていますがら。

2001年7月8日

「歩いて綺麗になれ」

子供の頃「もやしっ子」で、背が高くやせっぽちだった僕は常に背中を丸めて生活をしていました。

なので僕の肋骨は極端にいうと「犬の様な」四足の動物の様に少し前後に厚みがあり、今でもごくたまにですが、体形の中でコンプレックスになる事があります。

猫背だった僕の背中を矯正してくれたのが、長年宅配会社を勤め上げて退職を決めた際に知人に薦められて通い始めた鍼灸院の先生です。利き腕ばかりで重い荷物を裁いていた為に生まれながらの「前後」だけでなく「左右」にまで悪い傾き方をしていた為、体の自身自身のあちこちに無理がかかり、得に十二指腸は「あのまま放っておいたらかなり危険な状況になっていましたよ」と言われてぞっとした程でした。

元々が平地を歩いていてもつまずく位ひどかった足ー下半身についた悪い癖を直してもらう為に通い始めたのですが、通い続ける内に先生は自分の背中にある悪い癖（猫背）にも気が付いて、針を当ててくれました。そのお陰で今では得に意識しなくても背中を真っ直ぐに伸ばして歩ける様になり、ただ歩くだけの事がとても快適な運動にすら思える様になりました。

週末に僕は近所の大きな公園に出かけて、外周を軽くジョギングしていますが、膝が少し弱いせいもあるので、いきなり走り出す事はせず、しっかりと柔軟体操をしてから少し歩いて、日ごろの生活で崩れかけた体のバランスを、正しいスタイルに戻す事から始めます。背筋が伸びる様になると、自然に腹筋に軽く力を入れながら歩く事になり、腕の振りもしつかりして、足の出し方も無理なく大腿に変わり、あるく事自身が楽しくなつて来ます。それから徐々にスピードを上げ、時には全力疾走に変わる事もありますが、決して無理はしていません。あまり体に負担をかけると、帰った後で疲れて眠ってしまつてやりたい事が出来なくなるので（笑）最近はそのこにいい汗をかける程度に済ませる事になっています。（本来は何時でもちゃんとした声で歌える様に腹筋を鍛えておくという意味で走っていますので）

体を動かしていい汗をかく事は精神面でもとても大事な事なのですが、こと僕が走る公園では、時々前のめりの姿勢でバタバタと足音を立てながら、険しい顔して走る人を目にする事があります。見ていてとても苦痛そうに見えて、精神上よろしくないのでは？とすら思えます。走る時に際しても、僕は「音を立てない事」を心がけています。それが体に無理をかけないバロメータだと信じています。

あらゆるスポーツの場面で、「フォーム」というのは常に大事に扱われます。野球やゴルフのスイング、投球のフォーム、水泳、陸上。勿論それぞれの競技に合わせた体力作りが大事な訳ですが、それと同時に体に無理な力がかかる事なく力を発揮出来る様、競技者は常にこの「フォーム」に注意を払っています。

中でも陸上、それも100mの様な短距離程、「歩く」事がとても大事だそうで、100mの日本最高記録保持者ですら「走りの基本は歩く事」と宣言しています。それだけ「歩く」という事は、スポーツの観点から見ても、または健康、美容に至る観点から見てもとても重要な事なのです。多分「皮肉」だと思つのですが（笑）女性から「良いスタイルしてますね」と言われる事が非常に多くて、そう言う人は多分に自分自身のスタイルにコンプレックスを持っている訳ですから必ず「歩きなさい。そうすればもっとタイルは良くなるよ」と返す事にしています。時折女性誌の中で「正しい歩き方」なる記事があり、「背筋を真っ直ぐ伸ばして腰を水平に、足の裏側の体重移動は・・・」なんてとても細かく書いてあるのを読むと「そんなに考えながら歩けないよ」と呟いてしまいます。

僕の「正しい歩き方」のアドバイスはこれだけです。

バストトップが一番前になる様に歩く

意識しづらい背中、筋肉や骨に無理に注意を注ぐよりも、こうした方がずっと無理無く背筋が伸びて、その相乗効果で歩く際には自然に腹筋に力がかかりウエストを細くする効果を生みます。と同時に歩幅が自然に大きくなり、左右の足を送るラインがより一本の線に近くなります。見た目的にも、²本のラインの上をなぞる様な歩き方よりも、¹本の線の上を左右の足で「代わる代わる」なぞる様の方がきつと綺麗に見える筈です。加えて大腿で歩くという行為そのものには、元々ヒップアップという効果があります。

大切なのは、前述の「背筋を・・・」云々の様な、意識を心の中に閉じ込めるのではなく、「バストごと心も前向きに」という、「心」を前に向けて開放してあげる事です。「上を向いて歩こう」という事です。

あと欲を言うなら、歩く時にはヒールなどでは無く、クッションのしっかりしたジョギングシューズがお勧めです。足の裏側は、歩く事によって体の下に行った血液を心臓にまで押し上げてくれるポンプの役割があります。その効果はクッションの柔らかい靴を履いてこそ発揮されるので、底の硬いヒールではあまり効果がありません。仕事等ではヒールを履いていなければならぬ方ならば、それは「仕事用」として会社に残して、通勤ではジョギング・シューズで、というのでもいいかでしょうか。最近ではファッショナブルなシューズも沢山ありますから（厚底もありますけど・・・）

某下着メーカーの調査によりますと、女性の体系は20年前と比べてバストが豊富になった反面、ウエストまでも数センチ増えているとの事です。実際街中でも、スタイルそのものはとても素晴らしいのに、何故かウエスト、それも「お腹」が少し出ている人をよく見てしまします。

「歩く」という事は、一番効果的で、且つ一番お金のかからない健康法。騙されたと思ってもいいから、ぜひ一度お試ししてみては？

（2001年7月9日）

「ニッポンのクルマの未来のハナシ」

NHKの特別番組「あなたも会社をかえられる」の中で、「80点主義」の風潮が根強いトヨタから社内公募で選ばれたメンバーにより異端児的存在車「VILE」誕生に至るストーリーに一際興味をそられました。初期デザイン案がそのままカタチになった様な超斬新なデザイン、戦闘機をイメージしたという赤いメーター類とアルミ製シフトレバー等等、中高年にシフトしつつかある同社の購買層を更に若者向けに拡大するとの事。シトロエンの「信者」を自称する自分の目にはあの狭いウインドウ類が気になって仕方ないですが、さりとて20代前半迄の自分といえればセリカを2台も乗り継いでたりして。あのあの頃の自身の感性を振り返ると確かに狭いウインドウも、アルミの代わりにメッキ処理でピカピカしていたシフトレバーも「カッコ良いから」の一言で済ませてましたし、何よりソレックス・キャブの吸気音と直管マフラーの排気音、バネを切つて休く済ませたシャコタンがまた堪らなかったのですが・・・

（自分で書いてて、言葉の優しさと内容が妙にチグハグな気がしますが、まあ「VERY」の愛読層にだって元ヤンキーはいるでしょう・・・（笑）

＊補足VERY＝30代向けの女性詩。創刊コンセプトを

「バブル絶頂期に青春を謳歌し、崩壊と前後して結婚、家庭に入った「不況知らずの世代へ」としただけはあつて普通の女性詩に有り勝ちな「噂話」「お悩み相談」の類が一切無い、夢100%という意味では、存在価値において筆者も十分に認める雑誌。

日本の自動車は狭くて高価な国土で暮らす日本人が少しでも他人より優越感を得られる様、生活を彩る道具というよりも、所有する事そのものへの優越感が優先した為に、世界の目から見てもかなり偏った進歩と遂げてしまつて来ました。女性にも扱えるけど進化を発揮させる機会などまず無いツインカム・ツインターボ、サイズはたつぷりなのに応接セット顔負けのフワフワなシートを乗せてすぐ室内が狭くなった「高級車」達。スタイルを重視して丸みを帯びた形にした方がいいが、我が家にたどり着く道が常に視界良好の広い道とは限らず、1年もすれば四隅は細かいひっかき傷だらけ。僕の乗るシトロエンBXがデビューしてからもう20年になるというのに、未だ持つてトランクに洗濯機も載せられない同サイズのファミリー・カーが出てこないのはフランスの「パカンス」の様な長期休暇の週間が日本には無いからだけでしょうか？買ったパソコンの箱位は載せたいよね。スカイラインGT-Rに洗濯機を載せられる事までは要求はしません・・・

好みはどうあれ、見た目的にも刺激を与えてくれる前述の様なクルマが増えてくれるのはとても好ましい事だとは思いますが。エコカー等環境面を配慮した技術開発では目を見張る物がありますが、まだまだ「機能美」や生活スタイルそのものを設計ポリシーに反映させたクルマ、という意味では日本車はフランス車に数年遅れていると思う事があります。加えて日本車はモデルチェンジの度に存在を定義しているはずのコンセプトそのものを平気でコロコロ変えてしまう場合が多く、「こうあるべきだ」というアピールに乏しい。ベンツのマスクばかりを真似て来たツケを取り戻して、坂本龍一やイチローに匹敵する「世界のどこに輸出しても恥ずかしくない」商品開発をするまでには、まだまだ時間がかかりそうです。

VILEで彼女とデートしていた世代が結婚して子供を作った時に、どんなクルマを

選んで乗るのでしょうか。またその頃にどんなクルマをメーカーは用意してくれ
るのか、興味は尽きません。

（2001年7月14日）

忘れられた「Remember」

映画「パールハーバー」が日本でも封切られ、順調な滑り出しをしているとの事です。

ご存知の様にこの言葉の頭には「Remember」の文字が付き、宣戦布告よりも早く奇襲攻撃をしかけてきた旧日本軍に対しての憎悪を募らせる言葉として長きに渡り使われて来ました。日本側がアメリカに際して通達した宣戦布告に際し、時差を考慮していなかったか、又はそうと知って・・というのが問題の焦点の様ですが、本国アメリカですらも、「歴史までをビジネスにしようのか」という反論が無い訳ではありません。併合という民族的民族的侮辱を今も忘れない韓国で日本の歌謡曲や漫画が若者層に指示されているのと同様に、歴史的悲劇が長い月日を経て、格好の「素材」の対象へと変えられてしまう事は遅かれ早かれやって来てしまう事で、「パールハーバー」の場合は存命中の当時を知る方々も多い事でしょうから、「まだ少し早いのでは？」が正直な所でしょう。

それを差し置いても、どうも最近のこの手のアメリカ映画はCGに頼りすぎる傾向があり、ストーリーが軽視されている感があります。「インディペンデンス・デイ」等は最たる例で、最後に素人パイロットの一人が大統領に「息子によく」と告げて敵に体当たりする所などは、「死して御国にご奉仕する」第2次大戦化の日本とどう違うのでしょうか。

加えてこの様にCGをメインとしてシーンを作りこんでいく作品に有り勝ちなのに、登場している役者そのものに臨場感を掻き立てるだけのセットが実在しないせいなのか、ストーリーにさほど影響しない、台詞も無いという登場人物の、「つつ立っているだけ」という役者ぶりには常に閉口してしまいます。私が好きな「アポロ13」の中でも、乗組員が無事地球に生還した際、それまで冷静を装っていた管制官が思わず椅子に座り込んで涙ぐむ、その後ろで無表情に拍手をするだけのスタッフに、はビデオを観る度に白けさせられます。プロデューサーやCGスタッフの想い入れだけが先行し、現場スタッフにまで「映画を作る」一体感が今ひとつ乏しい様に思えるのは僕だけではない筈です。

歴史的事実を元に映画化、ドラマ化するに際し、ある程度の演出は避けては通れず、この「アポロ13」の中でも、トラブル発生後の司令船の中では乗組員同士の細かなトラブルが絶えなかった様に描かれています。実際には選りすぐりのメンバーだけの事はあって、多少の不安や愚痴はあったものの、最後まで「宇宙船パイロット」としての誇りを貫いて任務を遂行していた様ですから、それが無かったら映画そのものとして成り立たない事は十分僕にも理解は出来ます。

女性の多くは「戦場という最悪の状況の中で人を愛する事に惹かれた」と思われる方が少なくない様ですが、実際の戦争で誰に愛される事無く、後ろ髪を引かれる想いも無く出征し、死にたくて戦う人等居る訳がありません。出来合いのシナリオに影響される事なく、不況という経済戦争の中でも貴方を愛しようとする家族や誰かの事を、貴方自身が愛してあげる事こそ、今改めて気付いてもらうべきではないでしょうか。

(2001年7月15日)

「夏ですが・・・」

言わずと知れた猛暑が全国各地で続き、**で摂氏40度を超えたとか、熱中症で何人が病院に運ばれたとかが毎日のニュースに登場して来るこの頃です。勿論僕自身も毎日汗だくになって過ごしている一人に過ぎないのですが、こと正直な気持ちとはいうと、「暑くて暑くて堪らない！」という程ではない。怒られそうですが、偽らざる気持ちです。こうして執筆している最中でも、クーラーを消した部屋の机に向かい、ノートパソコンの前にタオルを敷いて吹き出る汗を吸い取らせてはいますが、ジョギングの帰りである事、してその外では、日中の暑さとは少し違った、乾いた風が流れていたなあ、という想いです。

健康管理で身に覚えがあるとすれば、朝と決め付けてはいたものの、寝坊するとズル休みしていたジョギングを、夜の涼しい時間に欠かさず続けてきた事でしようか。お陰で今現在の体重はベストより3kg程少なく、友人に会う度に「お前痩せ過ぎじゃないのか？」等と心配がられますが、むしろ「絞り込んだ」お陰で体調を維持出来ているのだ、と思っています。

それにジョギングといっても、僕の場合は近所の公園迄の往復約3kmを徒歩と、公園内のジョギング・コースをLSD*で軽く流す程度で、お世辞にも「走る」程体に負担をかけるものではない、でもそれが逆に長続きさせる秘訣になって、この暑い夏を乗り切る体力を維持できる結果になったのではないでしようか。

先日、某大学に講座を受講に行った際、クーラーの冷風をもろに受ける席に就いたお陰ですっかり体を冷やしてしまい、帰路に着く際、炎天下に野晒しにしていた愛車（しかも黒い色！）に乗り込んでも少しも汗が出ず、逆に日差しを痛いと感じて焦り、わざとクーラーを切って運転して30分。やっと汗が流れてくれてホッとなりました。こんなシチュエーションの方が体にはより負担がかかるのは言うまでもありません。

その昔気象予報士が放送の中で「夏の甲子園というのは冷房の効いた涼しい部屋で観ても少しも選手達の気持ちに近づけませんね。たまには炎天下のお庭にテレビを置いて、汗びっしょりになってご覧になられてはいかがでしょう？」と言った事がありました。

僕も昔は高校球児。でも最近の高校野球と来たら、言うこと聞かない後輩をこついたら暴力事件。放っておいたら熱中症でバタリ。鍛える方も鍛えられる方も、やりにくい時代になりましたね。

（2001年7月20日）

* LSD (Long Slow Distance) = 陸上競技の練習方法の一つ。体に強い負担をかける練習をした翌日等には、完全に体を休めるよりも軽く、且つ積極的に体を動かす事により体内により大量の酸素を取り入れた方が、結果として疲労が早くとれると言われる。1週間単位で練習スケジュールを組む場合、必ず1日はLSDを組み込んで、疲労回復に充てるこの事で、距離や早さは、走る人それぞれが自分に合わせて決めれば良い問題だそうです。

「靖国」

小泉首相が近隣諸国・特に中国、韓国への配慮を示す形として、今日8月13日に靖国神社を参拝した。ニュースでもご承知のとおり、日を問わず参拝したという事について海外、野党の反発はかなり大きく、今後も尾を引きそうです。

諸外国が槍玉に挙げる最大の理由に、かつての旧日本軍が犯した「侵略戦争」の最大の立役者達である第二次大戦下のA級戦犯までもが、「昭和殉職者」として祀(まつ)られていた事でしよう。ヨーロッパで言えばヒトラーやムッソリーニが祀られている所に国家の首相が参拝に行く訳だから、侵略を受けた国が「軍国主義日本の復活だ!」と非難を発する気持ちも分らないではありません。

この「首相による15日の靖国参拝」も、元を辿ると昭和50年に三木首相が参拝した事が始まりだったそうですが、あくまで「個人として」の参拝であり、あまりクロージアップされる事はなかったとか。それが53年に憲法の政教分離原則とともに東条英機元首相らA級戦犯が合祀され、更にバブル景気が始まりつつあった昭和60年、「モノをもっと買いましょう」「一般消費者の購買意欲を更に煽った愚かなN首相が「内閣総理大臣として」を名言し、諸国の感情を逆撫でるに至った様です。(言い方が悪くて恐縮ですが、僕は個人的に今でもこのN首相を「歴代最も愚かな総理大臣」と思っています)

ただ、僕個人として、総理大臣としてという立場的なものによる問題は多少有りとはしても、明治維新以来、今の日本の平和を築き上げる礎となった、そこに眠る246万6000人ものご先祖様に際して哀悼の意を示す事の、一体どこがいけないのでしょうか。近隣諸国に対する配慮が無いといいますが、いざ外交という場面では、何時もながらの「弱腰」外交に苛立たしさを覚えるのもまた事実ではないでしょうか。海外のホームステイを受け入れる家庭に「日本の学生が世界で一番愛国心が無い」と言わしめる日本の大学生や、某番組で渋谷の女子高生に、神風特別攻撃隊がアメリカ艦船に体当たりして散っていく場面の映像を見せた際「バツカじゃないのぉ」と平気で言っていたコギャル達への教育の方が遥かに問題なのではないでしょうか。

僕は無宗教であり、無党派でもあるけど、「日本人である」事に誇りを持ちたい。けど、家屋の耐震構造に対する「耐震神話」や「夜に歩いても安全な法治国家」という「安全神話」が次々と崩れ去り、今や持つべき「材料が無い」というのが今現在の正直な所です(非常に情けない話、私が住む地域では今カツパライが今非常に多い)。近隣諸国の顔色を伺う余りに首相を猛烈に非難しまくる野党党首に対して、貴方達が一国の首相であつたならば、一体どういう行動を取ったのか、またそんな貴方方はどんな風に日本を変えられる事が出来るのか、ぜひ教えて欲しいものです。

(政治に纏わることは過去余り書かなかったので、少し乱文になりました)

(2001年8月12日)

「新庄がんばれ」ゝ選ばれし自然体ゝ

マリナーズのイチローが、大リーグの新人最多安打どころか、大リーグ記録をも塗り替えそうな位に勢い付いている。その反面でメッツの新庄も好調で、3日にはなんと「あの」主砲マイク・ピアザを差し置いて4番に居座り活躍なんぞしてくれている。

恐らく「多数派」には失礼な話だが、僕は新庄の方が好きである。結果をきちんと出すという事においてイチローの方が上であることは紛れも無い事実なんだけど、長嶋茂雄で育った世代には、いくらバット・コントロールが上手いとはいえ、あの「寸止め」の様なスイングは、いくら「チームの勝利が優先」の、超が付く位の足の速さ喪併せて、「塁に出る事」を最優先させたスタイルである事是否定出来ないにしても、ちよつと見ていて迫力に欠ける。

方や新庄。先輩評論家の仰つてゐる通り、確かに「大リーガー」と呼べる程、筋力トレーニングや相手党投手の分析等、「努力」は余りしていそうにない（笑）でも例え三振する時であれ、首の後ろまでちゃんと回り込むフルスイングにはつい好感を持ってしまふ。少年時代、誰もがあんな風に思い切りバットを振っていたはずであるし、ヒットが出た時にはあんな風に素直に喜んでいたはずである。ひとつや二つの欠点があつても、それを補える魅力を持ったヒーローの方が、親しみが持てて当然だし、見ている子供たちだつて「新庄が（大リーグに）行けるんなら僕だつてきつと行ける！」と思うに違いない。

日本の野球は徹底した管理と駆け引きの試合。解説者は次々と次の動きを不可読みし、元気で有名な我が地元球団の監督も「真剣勝負を黙って見てろ」と言う有様。管理も駆け引きも、誰もが日常の現実でうんざりする程接しているのだから、せめてスポーツを観戦する時位は何も考えないでスカツとしたい。（でもその理屈でいうと、大砲ばかり集めた某球団の野球も「一理アリ」になつてしまふのだが）

雨の多い日本が故のドーム&人工芝球場の野球は、興行的にこそメリットが大きいものの、選手の寿命を縮める硬い足元は内野手に「打球に飛びつく」事をためらわせる。これも「面白くない」と思わせる一因なのだろう。アスト口球場の様なう渦巻き式？でなくても、セーフコ・フィールドの様なスライド式の屋根ならば、人口ではない天然の芝を植えて、選手達にももつと思ひ切りの良いプレイが期待できるはずなのに。（分らない方ごめんなさい）

最も、「どちらが友人として相應しいか？」と聞かれたならば、何を聞いても子供っぽい曖昧な返事しか返つてこない新庄より、あらゆる意味で、良い意味での刺激を与えてくれそうなイチローの方がいいかも知れないが、どちらにせよ「生意気」でないと、本場では通用しないのだろう。

（2001年9月6日）

「爆弾作るよりはマシ」

昭和50年8月、東京の三菱重工ビルで日本赤軍が仕掛けた爆弾が爆発し、多数の死傷者を出した事件が発生した際、自宅の地元紙の夕刊で連載していた4コマ漫画「ブロー君」（故・福地泡介作）の主人公の台詞である。更に細かく言うところ

1・（近所の小学生と「電車ごっこ」で楽しそうに遊ぶ高校生の図）

2・その母「高校生にもなつてあれでは将来が心配で・・・」

3・ブロー君「爆弾作るよりはマシですよ」

4・母「それはそうですけど・・・」

確かこんな話だったと思う。かなり昔の話なので記憶が定かでないが、珍しく堅物の兄貴と二人で「そりやそうだ」と笑ったのを覚えている。

「何をやってもいい。ヒトに迷惑をかけさえしなければ」これは夢を追って行動する時にも、一般の社会人として生きていく際にも鉄則である。しかしながら大人を放棄した大人も、それに大した教育を受けることなく育った子供も、それが「ヒトの迷惑」である事すら気付かないまま平気で迷惑をかけまくっているのが実情だろう。手に負えなくなつたペットを平気で捨てる大人、邪魔で堪らない「ジベタリアン」等等・・・

勿論僕も100%正しいとは思っていない。自らを強く信じて行動しながらも、時として周りを伺つては後悔する事だつてある。でも最低限「正直者」な取り柄のみのお陰で、辛うじて社会人として生き残る事に及第点を頂いてはいる様ではある。

皆さんがいやという程目になっているであろうNYの貿易センタービルの崩壊現場。そこにいるのは世界じゅうの金融企業を代表してやって来た、文字通りの「超エリート」であるはずなのに、超高層階に取り残された人々は、炎と煙に巻かれる余りに「普通のヒト」となつて錯覚を起こし、次々と死のダイビングへと散つていった。決して死にたかつた訳ではないはずなのに。

ならば残された「一般人」は、生かされていることを肝に銘じて、「死に者狂いで」この世を生き抜いて行かなければならないのが、与えられた唯一最大の使命ではないだろうか。

幸いどんな仕事に就いても、1週間で1日も休みを与えてくれない仕事なんて今のご時世には無い。開放された時には、「人に迷惑さえかけなければ」何をしていたつていいのだから。

（2001年9月13日）

「忘れてなかったRemember」

まだつい2ヶ月前、映画パールハーバーをちよつと皮肉って書き、「Remember」を忘れてしまったのか？と書きました。しかし猛烈に悲しい事件と共に、やっぱり忘れていなかったと思わせるのが、先のテロ事件でのアメリカ政府の「これは真珠湾の再来といえる奇襲だ！」の言葉。先の映画を作った監督がどんな顔をしているのかを見てみたい気がするのは僕だけだろうか。行方不明者の中には、「このビルは安全です」の館内放送を聞いて、一度非難しかけたにも関わらずオフィスに戻った人も多いとか。改めて「自分の身は自分で守れ」の言葉を思い知らされた気がする。

こういう非常時になると、日頃危険と接する機会が日本より遥かに多いせいだろうか、アメリカ人の行動は実に素晴らしい。「観てるだけじゃなくて何かしなくては」とポリスに差し入れをする女性、「俺達が立てたビルなんだ。これは俺達への挑戦だ」と、現場の普及作業に加わる建築関係に従事する市民。とかく個人主義が時として揶揄されるが、チームワークと行動力の良さは日本人はとても及ばない。

どんなに恋愛ストーリーを美化した所で、戦争がテーマになっている以上、現実のそこには沢山の「死」が存在し、血が流れているのである。タイタニックも同じ事。僕自身シユワちゃんのファンだから人のことを言えた立場では無いのだが、現場に直面した市民の多くが「映画のシーンみたいだ」と語っている通り、飛行機が突っ込んだり、巨大な爆発の後巨大なビルが崩壊するといった「作り話」を、我々は過去何度も観てきたはずである。しかし今回は残念ながら作り話ではなかった。ニュースの速報の中で2機目が突っ込んだ瞬間、僕は30分間も口を開けたまま動けずにいた。世界は余りにもハリウッド製「ドンパチ」のCG映画に慣れ過ぎていたのではないだろうか。

やたら暴力（「拳法」というヒトがいるかも知れないが、シロートの真似事は所詮「暴力」である。）で相手を倒す類のアクションゲームが蔓延して社会に悪影響を及ぼしているのを少なからず自認し始めたのか、僕らが子供の頃憧れ、親しんだTVのヒーロー、ウルトラマンも仮面ライダーも、最新作は簡単に悪者を殺したりせず、共存を図る展開になるものが増つつあるという。上記で名を馳せたCG作家が腕を振るう場所 hereからは減っていくであろうし、個人的には「減って欲しい」と思っている。ジャッキー・チェンも少し前に「ハリウッドの映画はCGばかりだろう？私達はそんなものは使っていないぜ」と言った言葉が、今更になつてとても貴重な言葉に思えてくる。

今回の事件を機に、ハリウッドの映画は確実に変わっていくだろう。「菊次郎の夏のアメリカ版を作ってくれ」というコールが、ハリウッドから北野武の下に来るかもしれない。（見てもいないのに偉そうに言つてごめんなさい）観る側もそれを「つまらない」とは決して思つてはいけない。紛争の無い平和な国で平和な時を送つてこれた事そのものが幸せなのだから

（2001年9月14日）

「再びノートPCの薦め」

歴史的な第大惨事から1週間が経ち、NY証券取引所や大リーグも再開され等、悲しみの中からも少しずつ、前を向いて生きようという動きがアメリカ市民にも現れ始めている反面で、前回の「忘れてなかったreader」で書いた様に、早くもアメリカの映画館でシユワちゃんのアートをモチーフにした新作映画が上映中止となっている。日本のシユワちゃんファンとしては、今後もコミカルな分野で活躍して欲しいと思う次第である。

しかしそれでもどうしようもないのは、ビルの破壊により一瞬にして失われた、沢山の企業の膨大なデータのこと。行方不明者の安否もさることながら、企業にとつても「死」を意味するこちらも相当なものである事が容易に想像がつく。個人レベルですらたった一個のファイルを消失させただけでも大慌てなのだから。

古くから私のHPをご覧の方には、既に一度書いていたのでご記憶の方もお見えとは思いますが(お願いだから書いて下さい！(苦笑))、僕パソコンはWindows・Mac共にノートであり、それはこれからもずっと変わる事は無い。元々の理由そのものが、自身がパソコンに興味を抱いて雑誌を買い漁り始めたのが、あの阪神大震災の直後であり、読者の投稿の中に「家具の下敷きになってパソコンが壊れてしまいました」の類を非常に沢山見てきたからである。以来「いざという時に持って逃げ出せる事」「ノートで出来ない事はやらない」が僕の環境構築の確固たるポリシーとなり、現在に至っている。webコンテンツ制作の職を経た現在、「制作の現場」を肌で感じた今ならばこそ、CRT画面での表示色確認や、3DCG制作の際には超ハイスペックなマシンが不可欠である等、一部の場面ではデスクトップか、モニターが必要な場合があると理解したが、それでも工夫次第でなんとかなると思っっている(それに多分、今後CGの需要は減って行くでしょう)

携帯性に優れている反面で拡張性に劣る。ノートPCの特徴を一言で言うとなんか、決してそうは思わない。実際自分の愛用しているIBMでも拡張ステーションのCD-ROMをHDDにワンタッチで交換すれば、ミニリングバックアップ環境はたちどころに整うし、プライマリ側のHDDの交換も慣れれば5分で出来る等、何より「手軽」である。こと企業がこうしたノートPCや、「安い」UNIXでサーバーを構築するとなると、「ネットワークポリシーとしてどうか」という議論になるが、いざ停電の際を考慮しても、UPS(バッテリー)内臓のノート型はここでもデスクトップと同等の機能を持つことになる。容量はどうか？ノート向けPCの9.5mm厚のHDDもデスクトップ同様に進歩は激しく、僕が知っているだけでも40GBのモデルが存在している。あいにく僕には6GB以上のServerマシンとデータしか管理したことが無いので、それ以上のデータを常に扱うであろう舞台ではどうか？という質問に際しては答えられないが、以上に挙げたこれだけの要素から判断しても、相当数の企業のネットワークはノートPCでも足りそうな気はしている。

そもそも企業ユースのマシンならば、マルチメディア制作会社以上に、減価償却等の都合で旧式になりつつも同じマシンを使い続けなければならないはずだから、容量的に常にGB単位のデータをやりとりしているとは考えにくい。もししている大企業があるならば、それこそデータを各拠点でバックアップし合う様なシステムを構築するべきである。

マルチディスプレイだが、これも安くはないものの、PCカード接続のグラフィックカードも商品としては結構存在しているからこれまた十分可能である。

更に、立派なサーバーマシンである程、ほんの数cm移動させるだけでも「作業」になる。前後左右ならともかく、「上下」となると簡単にはいかない。去年の「東海大洪水」の際、協力会社の営業の方が「お客さんがサーバーを水没させてしまったので・

（苦笑）「と電話で答えて思わず失笑してしまったが、ノートPCなら稼働させたままの状態でも、少し上に持ち上げるだけで被災は回避出来たはずだし、仮に誤って電源を強制終了させてしまったとしても、HDDのセクタ数個分のデータの消失だけで済む筈だ。

では最後に盗難の危険性は？ここ数年の企業データの漏えいに纏わる犯罪のケースは、社外から強引に進入してルパン三世のごとく華麗？にかっさらっていくよりも、現場の社員がお金欲しさにデータを盗んで外部に売りさばくケースの方が遥かに多い。これは環境以前に社内モラルの問題である。それに最近のネット犯罪は、ガラスを破って進入するなんて危ないことはせず、もつとスマートにネットワークからセキュリティホールを探して進入したりとか、今日のニュースの様にメールにウイルスを添付させたりといく筈。これまたハードのスタイルは問題ではないと思う。

「コタツで亀さんになりながらもチャットが出来る」こんな不純な動機が、こんな歴史的な大惨事を持つて証明されるとは・・・

（今日は少し長文になりました。最後までお読み頂き有難うございました）

（2001年9月20日）

「NETオークションの話」

最近ネット・オークションに結構はまっている。

元々が自宅で使いこなせなくなつた電子楽器の類を処分する際に「買い取りセンター」に持って入ったが、期待していた程高い値段で引き取ってくれそうになかったのが「あっちへ出してみようか」と思つて出品したのが始まり。その後は自分が落札して購入する側に回り、当初はあまりの商品数の多さに圧倒されていたが、「常時接続を自宅に導入したのを機に序所にハマリ始めて、今では巡回用のシェアウェアを使つて効率的に商品を探し出して、欲しいものを安く買う為の実に有効な手段として活用している。先日も店頭でなら新品で3万程度の出費を覚悟すべき「HUB」という機材を僅か1,000円で落札し、自宅でwindowsとMacを繋いでLANを完成させたばかりである。

（皆さん、お使いのシェアウェアは、作つて下さつた作者に敬意を表して、ちゃんとシェアウェア登録して使用しましょうね）

このオークション。日本人には「刑事コロンボ」等のアメリカのTV番組で時々お目にかかる程度だったのだが、当然出品商品は一本千ドルもするワインや万ドルもする美術品ばかり。その後日本のバラエティ番組で一般大衆化され、日本で始まつたインターネットのブームと共にコンテンツとして市民権を得るに至つたのだと思う。

元々が消費税の高い欧米の文化だったんだらうこのオークション。本場のアメリカのサイトに行けばもつと活発なんだろうと思つて覗いてみると、以外なのが日本が異常なのか、日本程活発では無い様に見受けられる。

「走れこータロー」（今ならマキバオー？）のヒット曲を出したウィークエンドの山本コータロー氏が、グループ解散後に渡米して1年に渡り過ごした日々を綴つた著書「アメリカあげます！」と、当時のNHKの番組でも取り上げられて事だが、広大な土地を持つアメリカでは「引越し」というのは日本より遥かに一般的な作業の一つらしく、家ごと大型のトラックで運んで引越すという作業も決して珍しくない。またその際、西部開拓時代の名残りで、少しでも身の回り品を身軽にする為なのか、自宅のガレージに家財道具を並べて近所の人に買つてもらう、文字通りの「ガレージセール」が個人宅で当たり前の様に開かれるという。驚きなのが「出品」される商品の幅で、電化製品や家具は勿論のこと、衣類や下着までもが平気で商品として並べられ、当たり前のように引きされるといふ。当時のTVの場面で印象的だったのが、1枚のブラジャーをご近所の奥さん達が皆で品定めしているシーンで、流石にこれは洗濯物をお日様の元に翳して「日光消毒」する潔癖性を未だ持つて維持する日本人には理解が出来ない所だろう。（因みに世界の総人口でも「箸」を使う人は全体の3分の一近くいるそうだが、「個人専用」で使い分けているのは日本だけだそうである）「使えるものは使う」一見、何かにつけてパーティを開く派手そうな生活スタイルの反面で、ケチる所は恥る事無くケチる。稼いでもないコギヤルがブランド品を身につける何処ぞの国の事を思えば、素晴らしい文化の一つであると言えよう。

どこかで読んだ事があるが、このオークションで取引される総合計の金額となると、特にアパレルの分野では十分脅威に匹敵する程の数らしい。実は（これを公言すると常に女性の方に妬まれるのだが・・・）僕自身、ウエストが細すぎる為に一般男性用の既成サイズでは合わず、オークションで今探している所。当然価格の目安とは紙その他の媒体からの参考の「半額程度」ということになるから、今後自動車のマーク2、ローレルのような「中途半端な高級車」が淘汰されていくのと同様に、ファッション業界でも2極分化や付加価値型がどんどん増えていくのだろう。リサイクルの観点から言えば良い風潮だといえるが、景気面からいえば該当する業界の方にとっては頭の痛い話に違いない。

先日、中村正俊のラジオ番組の中で、このオークションに夢中な視聴者からのEメール

ルがあり、「正俊さんやつてますかあ？」の投げかけに際して当人曰く「（一応有名人なんで）名前が分かると後で何かとね．．」だそうな。あれこれ落札して安く品を手に入れ、「ラッキー！」と喜んでいる反面で個人情報をどんどん公開していることに気付いていない間は、僕もメジャーにはなれないという事なのか（苦笑）

ただ最後に、どこの世界にも悪いことを考える人はいる。後でトラブルに巻き込まれたりする事の無い様、情報収集はそれなりにしておいた方が無難。オークションはカタログ販売同様に通寸販売法の「クーリング・オフ」制度は適用されませんのでご注意を。

（2001年9月24日）

*最近のこと(デザイン部分に追われて書いてるヒマが無かったので「ヘッドライン」形式で最近印象的だった事を綴らせて頂きます(ˉˉˉ))

10月14日(日)
「」が連続で寅さんの映画を放送している。歳を重ねると共にあの映画の面白さ、良さが少しずつつ判つて来た様な気がする。寅さんと両津勘吉。日本を代表する「懲りない人、でも優しい人」のキャラクターを生み出した葛飾区に、一度行つてみたい

10月15日(月)「読めた!」
運転免許証の更新の為に試験場へ。3年に一度であるのだが、免許証用の写真撮影の機材が新しいものに変わっていることがすぐに判つた。講習会を受ける前の係員の挨拶で「先程撮つて頂いた写真はデジタルカメラですから直ぐに出来ますので」の言葉を聞いた瞬間にさつとひらめいてしまった。デジタルデータ化「データベースに反映」きつと僕が悪事をやつた時には、今日ここで撮つた写真が新聞に載るんだねえ、と思うと、後で受け取つた新しい免許証の自分の顔を眺めて、ちよつと首を傾げている姿勢に恨めしさを覚えてしまった・・・

なまじ「」業界を経験すると、見えてしまふ世界って往々にしてあります。

10月15日(月)PART2「貴方もノルマがあるのね?」
免許証の更新に行つた際に必ず行つのが「献血」。体は弱くないものの、血管が弱いとかで、今までずっと200ccだった。それが今回の事

係の方:「400ccでもいいですか?」

私:「今までずっと」よしましよう」って言われてきたんですけど・・・
係の方「じゃあとりあえず400ccにしておいて、どうしても駄目なら200ccにしましょう」

かくして若い検査官の検査の結果、「異常なし」と判断され、初の400cc採血に。

なんだかノルマに追われた営業マンに無理やり商品を買わされた気もち。

採血以降、どうも頭に血が行つてない気がしてならない。帰りの電車も間違えて違う駅で降りちゃったし・・・

「土のある暮らし」

唄の世界では新田一郎ヨロシクの都会派恋愛？を気取る僕だけど、疑うまでもなくそのルーツは「田舎物」(いいでしょ？新田一郎だつて奈良県出身なんだから)週末に親族から「野菜を取りに来なよ」の電話が初夏と秋に2回位あって、その時は流石に創作意欲所ではなくなる。

でも、とかくコンクリート製の部屋に閉じこもって丸一日何らかの形でパソコンと向き合っている生活が続くと、結構有り難かつたりする。

田舎とはいえ実家からクルマで8分足らずの、今や工業都市。幼い頃に兄貴とザリガニやドジョウを取った水路はまだ健在だが、この頃はお盆の季節に行つてもそんな遊びをする子供なんかいない。農地を工業用地に売却してお金持ちになつた本家では今や農作業をする人は誰もおらず、近所に住む母の弟が暇をみてはあれこれ植えて、季節になると僕らに分けてくれる。

時にはその折にモロヘイヤや紫蘇等の種や苗を貰つて、アパートのベランダに土を入れて育ててみるのだが、田舎の様にすくすくと育つことは殆どなく、単に「緑」として心を癒してはくれるものの、か弱く伸びた後はすぐに枯れてしまう。そんな小さな作られた自然では実りを得る程に根が伸びないからである。

汚れてもいい服を着て畑に出て、枝豆を茎から採つたり山芋の土を落としたり・恥ずかし「いんだけど、この齡になつて初めて「枝豆」と「大豆」が一緒のものだつたと初めて聞かされ「驚いたりもする。土と戯れ、実りを手にすると、この日ばかりは、とかく情報Onlyの生活がバカらしくなつてくる。狭くて競争の激しい世界に必死になつて居残るうとしていている自分が、つまらない存在にも思える。

母の弟が耕す畑は、周りに比べればそれは小さなものだが、枝豆からサツマイモ、山芋、モロヘイヤ、ナス、ラッキョウ、等々・実に沢山の種類が所狭しと植えられ、育っているのに驚く。叔母さんが苗をひょんと抜いた苗を見ると球根が、匂いを嗅いですぐに判つた。「シヨウガ」だ。チューブにしか入つてゐるのしか見ると野菜を摘んで頂いているが、僕はこの日の一番母はというと、雑草の用に無造作に生えている「ニラ」だつたりする。ラーメンや中華料理を彩るこの「草」、葉っぱを一本つまんで口にする「ニラ」だつたりする。独特の香りが口に広がって面白。

植物のこれら「精」の付く「植物は生命力そのものが旺盛だから、初夏に貰つてプランターに植えて休みの日に来て一緒に土でもいじらんか」叔父の言葉に真剣に心を動かされる歳にもなつた。

トランク一杯に野菜を積み込んで岐路へと急ぎ、その日の夕食は今日採れたばかりの枝豆だけでお腹を一杯にしてしまふという贅沢を久しぶりに味わつた僕である。

(2001年10月20日)

こんな夢いかが？」「商店街グランプリ・レースやろう！」

「アイルトン・セナの事故死がブームの終焉を告げたかの様に最近は何となく余り目立たなくなつた。F1「来年は久しぶりに日本人のF1ドライバーが復活するとの事なので、今年よりは賑やかにはなりそうだが、一見派手な世界の割には、日本のモータースポーツの底辺は寒くなる一方、僕自身がカート小僧として青春を燃やした「日本一横Gの強い」津保川サーキットも、今は無い。」

唄作りの時間を作る為に引退を決めたゴーカート。マシンそのものは実は僕が始めた20年以上前から殆ど価格は変わつておらず、メンテナンス・コストもかなり抑えられる様にはなつて維持費的にはかなり安く抑えられる様にはなつてゐる。にも関わらず、サーキットへ足を運ぶ人の数は不景気の影響もあるが年を追つて減少の一途を辿つてゐる。人気を維持出来なくなつた理由として、経験者なりに次の様なことが考えられる。

1. サーキットが遠い

「カートのレースが出来るサーキットはどこも都心から車で2時間はかかる山間部。これはサーキットの敷地確保の問題と、ずばり「騒音」が影響する。僕の現役時代、東名高速名古屋一からわずかの分の所に「名古屋サーキット」が完成したが、騒音による住民の反対運動に遭い、年足らずで閉鎖されてしまった。」

2. 重装備の割に楽しめる人が限られる（事実上参加者のみ）。

「家族連れに向いていない。練習やレースの度に丸一日貴重な休日が潰れては付き合う家族も次第にいやになつて当たり前。ましてや今は身近に手軽な娯楽が一杯ある。」

3. お金がかかる。

マシンやスーツ類を揃えても、一日練習に行くには移動費も含めると15,000円は要したというのが僕の経験。レース参加になると参加費やタイヤ交換も含めて4倍以上はかかつていたはず。（それなりに真剣に「勝ちに行く」事を狙つていたので（笑））今の時代、娯楽としては最早非現実的な金額といえる。

で、僕が提案したい新しい「ゴーカート」のスタイルがこれ。

1. 「小さく、軽く、静かなマシン」

騒音問題となるガソリンエンジンを捨てて電気モーターにする。電気自動車の最高速度のギネス記録が確か280km/h以上だから、100km/h、20km/hのラップ12分位なら今の技術でも、そこそこの重量に抑える事は十分可能はずで、サーキットをより都心より近い所に設ける事が可能になるはず。更に最高速を50km/h位に抑えれば、町内の道路を利用して小学校高学年程度を対象にした「*通商店街GP」も実現不可能ではなく、地域の祭りとの併催を働きかけることも不可能ではない。スポンジバリアやマシンのセッティング、地域の祭りとの併催をば、ビジネス的にも非現実的ではない。とに角マシンそのもののサイズを「5ナンバー」のミニバンにも載せられるサイズに抑えるべき（安全性向上のためのサイドBOXが義務付けられてから、特にマシンが巨大化してトランスポートする家用車選別に困る様になつたのも原因の一端）

2. 「家族で楽しめるマシンを作ろう」

高度なセッティングを求めるマシンの仕様を捨て、親子で乗れる汎用性を持たせる。タイヤは溝がある限り交換してはいけない。競技長の許可無しにパーツの交換を認めない等。

3. 「ランニング・コストの徹底的削減」

マシンを販売する場合には、チューニングの対象となるエンジンは省いてレンタルにする。現在でもこれなら20万円以内の価格に収まる。又は1の様にマシンは全てレンタルでの参加とする。（マシンの格差によるタイム差を防ぎ、イコールコンディションを徹底。）

等々・・・実現しようと思つたらもつと煮詰めなければならぬ事は沢山ありますし、部品メーカー側にはすれば消耗品の需要が減つて「やれるかい！」にはなるかも（笑）。しかしポールー個あればどこでも出来る手軽さ故に世界で普及しているサツカーとは違って、メジャーでありながらその扉を叩敷居が未だ高いのもモータースポーツの実情。貧乏な生活の中でレース生活を支えてくれたシューマッハー家など極めて稀な方で、高校時代、文句を言いながらもレースに参加費用捻出の為にバイトを許してくれた僕の親さえまだマシな方である。儲からないかも知らないけれど、底辺を広げると思つて、ここは一ついかがでしょうか（笑）。ヤマハ発動機殿（20001・10・28）